

# 新生戲曲展 蔭ノ器

作 宇里香菜

2023/07/07

新生戯曲展 蔭ノ器

(暗) 舞台中央板付き

「嗚呼．．．．．嗚呼．．．．．嗚呼．．．．．。」

(明転) 舞台中央のみ

「忘れてしまった．．．．．何処だ．．．．．。」

「毀れてしまった．．．．．と、遠い昔、ぼやいていた者が．．．．．。」

「くっくっく」

「ひとこと文句から始まり、批判して叱責する。間違いや勘違いを押し付けて、失敗すれば笑顔で傍らに寄り掛かり脅迫。繰り返す罰を与えては、また同じことを強制する。」

「誰も何も言わない。厭、言えないのか。それとも．．．．．。」

「あやふやな正義を振り翳した嫉妬と悪意で膨れ上がった民意、それは正しいのか。」

「拒否と沈黙を押し付けて、与えたふりをしているのは誰か。喪った瞬間、それを否定するのは何故か。」

「上塗りする書き換える言葉。一度吐き出したものを、時間を経て呑み込めると信じているのか。」

「まあ決めるのは、いつだって尊厳や信念を抜かれた媚び人たち。」

「正しいか間違っているかで判断している訳ではない、好きか嫌いかだけ。」

「害も無いのに、執拗に追い駆けて、吐き出し続ける。」

「護られ隠された安全な高みから。」

「目の前と言えないのなら・・・と、広い網を更に拡げて遠くから、拡張した安全で安心な幾千の壁を創り、その中で・・・。外は広く中は狭い。」

「可笑しいのに、それが当たり前」

「丸まった背中で未来を語り、空想科学、妄想哲学を教えているのは、誇りだらけの蓋を抱えた聖人君子。」

「素敵だよ。素晴らしいよね。」

「だってさ、何も考えなくても良い。」

「教える必要なんて無い。遣らなくても良いことを与えて、与えて、与えて。」

「本当に遣らなくてはいけないことを遣らせずに、引き延ばす質量を与える。」

「簡単に咀嚼出来無い程、突き出す目の前に視覚に焼き付ける。」

「此処だよ此処、現実を確実に脳に叩き込む。」

「そのうち、考えるという大切なことが欠落していることすら判らない。」

「ほら、もうさ。此処まで来たら。」

「知らないことを知ろうともしない。まあ出来無いよね。」

「理解を放棄する。」

「それで良い。何もしなくて良い。その方が、都合が良いから……………」

「誰の……………」

「世の中の仕組みは、複雑怪奇に何十年も繰り返して創り上げて来た。ちょっとやそっと調べても簡単には理解出来無い。」

「有耶無耶、曖昧……………空気を読む。」

「そう……………解り易い言葉で言えば……………伏魔殿か。」

「大きな真実を隠す為に、沢山の偽りと九十九種類の小さな真実を鑿めて話すことが求められる。」

「愉しく新しい物語は、そうやって生まれる。表面を綺麗に整えられた絵本を求めている。」

「無意識のうちに、自分にとって都合の良い真実だけを選び並べて安心している。」

「誰が本当のことを言っているのか、そんなことなんて分からなくて良いとすら。」

「諦める……………」

「誰かが創った移動制限の無い拓かれた世界を自由に探索する。」

「耳障りな……………とても格好良い台詞を吐き散らしながら我が物顔で歩き出す。

目的や過程は、その都度気分次第で変更されて、勿論、到達の条件を要求も強要もされない。」

「頼まれた依頼や些細な冒険を言われたまま気ままに進める。」

「指示を待つ余裕……………ゆとりを支持か。」

「但し取扱説明書も問題集の答え合わせも攻略本も虎の巻も無い」

「それでも生きる為」

「不思議だね。」

「この世界は……………」

「何と無く遣って来たこと、生きて来たこと。」

「振り返るとすべてが恥ずかしいなんて……………」

「ただ底で生きることが恥ずかしいから、また名を変え性別や容姿を変え、顔を隠して……………進むべき途が分からず我慢して其処に居る。」

「産まれて来る時代や場所等決められない。」

「誰よりも不幸だと暗示をかけて、必死に思い込ませているのは、ただ逃げているだけ。」

「どう足掻いても背負っている責任は、常に己に跳ね返って来る。」

「誰でも終焉は必ず来る。それがいつなのか今なのか、早いか遅いか、それとも己で決めるか。」

「どうしても生きていることから逃げたいと思ったら。」

「それはもう生きているだけで、倖せだと思うくらいに、一度、地獄のような絶望を味わうと良い。」

「横になり天井を見上げる。諦めたその時、縄の向こう。虚無感すら、小さな希望のよ  
うに耀き大事に思えて来る。」

「仮想と現実を、真実と偽りを混ぜて、虚構を創り出している此処は……………」

「ほら頑張れ、もっと頑張れ、もっともっと頑張れ……………いや底に居る者、もう  
充分、口惜しいほどに頑張っているか。」

「声をかけることより、傍で鼓動や呼吸を静かに聴いて、生きているということ  
を……………」

暗転

「確認する。」

「まだ、生きていなければ……………」

「何故。」

「護る者が……………いるから。誰よりも自分よりも大切な者がいる。」

「憶えている。」

「離れていても遠くにいても、それは変わらない。」

「不思議だ。それは楽しみだ。」

「だから、此処で諦める訳にはいかない。」

「ほら頑張れ。」

「抜け出してやる。」

「やってみせろ。」

「ん……………」

「まだ、この世界には、護るものがある。」

「素敵だね。生きるということは……………」

終